

# 世界的ベストセラー『アルケミスト』とは

榎本 眞理子

## 1. はじめに<sup>(1)</sup>

子供の本離れが進む中、『ハリー・ポッター』シリーズはなぜあれほどのブームを巻き起こしたのか。それを探る一助としてこの小論では、『ハリー・ポッター』に負けず劣らず世界中の人々に読まれて静かなブームとなっている『アルケミスト』を紹介し、併せてその人気の秘密を探る。

『ハリー・ポッター』は現在シリーズ全七巻のうち六巻まで刊行され、各々の日本語版も出ている。翻訳者の税金問題を巡ってやや影が差した感はあるが、それでも人気は一向に衰えない。合計二億四千万部、一巻あたり平均四千万部売れたことになる。一方の『アルケミスト』は一巻物の地味な本であるにもかかわらず、これまでに三千万部売れたそうである。映画など複数のメディアを巻き込んだ商戦を展開しているわけでもないのに、そういう意味では、これはすごいベストセラーである。

## 2. ベストセラー、『アルケミスト』

『アルケミスト』は1988年ブラジルで最初に出版され、ベストセラーとなって話題を呼んだようだが、国際的ブームに火がついたのは1993年アメリカのハーパー・コリンズが50,000部出版してからのことである。現在では62の言語に翻訳され、160カ国で出版されている。作者パウロ・コエーリョは今では「文学のポップスター」とも呼ばれる。ファンの中には大江健三郎、ビル・クリントン、前イタリア首相、マドンナ、ジュリア・ロバーツ、ラッセ

ル・クロウなども含まれる。この作品はミュージカルやオペラにもなり、ブロードウェイでもミュージカル化の話が進んでいるということだ。映画化の権利はワーナー・ブラザーズが1996年に入手している。また英仏独などで様々な賞を獲得している。

### 3. 背景等

#### (1) 「スワッフハムの行商人」

インターネットで『アルケミスト』を検索してみると、これには元になった話があるという。作家本人がそう言っているかどうかは確認できなかったが、確かに基本的なところはよく似ている。それはイギリスの伝説の“The Pedlar of Swaffham”（スワッフハムの行商人）である。イギリスではかなり有名な話らしく、スワッフハムには銅像も建っている。また行商人は実在の人物がモデルになっている。

この話を小説化したものには他に Leo Perutz という作家の「夜、石橋の下で」(“By Night under the Stone Bridge”) とホルヘ・ルイス・ボルヘスの「二人の夢想家の話」があり、ボルヘスのものは『砂の本』に収録されている。

その「スワッフハムの行商人」の話を簡単に紹介しよう。昔々、ノーフォークのスワッフハムにジョン・チャップマンという行商人が住んでいた。あるとき彼はロンドンブリッジに行くと大変得になる情報が手に入る、という夢を見た。次の夜もまったく同じ夢を見た彼は、旅支度をして愛犬を連れ、ロンドンに向かった。ある日の早朝ロンドンブリッジに着いた彼は、何時間もその手に入るはずの情報を待った。その様子を見ていた近くの店の主人が好奇心に逆らえず、「どうしたのですか」と尋ねた。ジョンが彼に夢の話をする、主人は笑って、「自分の見た夢を信じるなら私はスワッフハムというところのチャップマンという人の家のリンゴの木の下を掘って、金を掘り当てるよ。でも私は夢なんか信じないからね。だから君も家に帰っていままでどおりの暮らしを続けた方がいいよ」と言った。彼はお礼を言って家に帰り、リンゴの木の下を掘り、金貨の詰まった小さな壺を見つけた。その壺には何か

文字が彫りつけてあった。ジョンにはそれが読めない。後にやってきた托鉢僧に何と書いてあるのか聞いてみると、「私の下にもっと豊かな富が横たわっている」と書いてあるという。托鉢僧が立ち去った後リンゴの木の下を更に深く掘ってみると、もっと大きな壺があり、中に金が沢山詰まっていた。その直後教会が建て直されることになり、行商人は北回廊と塔の建て替え資金を出したので、スワツハムの住人は皆ひどく驚いた。

以上が伝説である。ちなみにスワツハム教会には15世紀にジョン・チャップマンという男が北回廊建て直しの資金を出したという記録が残っているので、それは事実であるとのことである。

## (2) 文学的背景

一時代前マジック・リアリズムが世界的に流行し、南アメリカの不可思議な小説が一世を風靡し、『百年の孤独』のガルシア・マルケスはノーベル文学賞を受賞した。マジック・リアリズムとはごく簡単に言えば幻想的な要素が小説の根幹にまでかかっているような造りのことである。イギリス小説で言えば『悪魔の詩』のサルマン・ルシュディーやアンジェラ・カーターがマジック・リアリズムの作家と呼ばれる。このような状況も、子供や若者だけでなく大人が真剣に『アルケミスト』のような幻想的な要素を含む小説を受け入れるのに寄与したと思われる。

## (3) 錬金術とは

錬金術とは最も狭い意味では化学的手段によって卑金属から貴金属、特に金を精錬しようとする試みのことである。広義では、様々な物質や人間の肉体、魂をより完全な存在に錬成する試みのことである。今では錬金術は眉唾ものオカルト的な所業になってしまうが、錬金術の発達過程で、現在の化学薬品が多く発見され、それが現代の化学に繋がっているのである。

一般によく知られた錬金術とは、物質をより完全な存在に変える賢者の石を創る技術のことをいう。この賢者の石を使えば、卑金属を金などの貴金属に変える事が出来ることになっている。

#### 4. 基本的パターン 「青い鳥」とお伽話

##### (1) 「青い鳥」

『アルケミスト』の基本的パターンは、「スワッハムの行商人」と同じく『青い鳥』に似ている。「幸せの青い鳥を求めて人は旅に出たが、旅先ではそれは見つからない。失意の末に帰ってみたら、青い鳥は結局家にいた」という展開は、様々な伝説や昔話のみならず、映画やテレビドラマ等のサブカルチャーにも頻りに登場する。それは一種のアーキタイプ的なパターンである。そのエッセンスは「人は家にいる鳥が青い鳥とは夢にも思わない。青い鳥を求めて旅に出て試練を経て成長して初めて、家にいる見慣れた平凡な鳥の真の姿が見えるようになり、それが実は幸せの青い鳥であると分かる」ということであろう。成長の中には、旅のもたらす精神の異化作用によって新たな瑞々しい認識力を獲得することも含まれる。

##### (2) お伽話

『アルケミスト』は典型的なおとぎ話のパターンも踏襲している。若い男の子が主人公のおとぎ話<sup>(2)</sup>は若者の成長の物語であり、ヒーローが旅に出て龍を倒すなどの試練を経て成長し、美しい姫君 = 結婚相手と宝物を手に入れて故郷に帰るとというのが典型的である。

#### 5. 『アルケミスト』

##### (1) 英語版と日本語版、プロローグ、テーマ

筆者が初めて入手した『アルケミスト』の英語版は1998年版で、タイトルは *The Alchemist: A Fable about Following Your Dream* であり、寓話であることを、副題ではっきり謳っている。また98年版には、1988年版に基づいている日本語版にはない「プロローグ」がついているのも目を引く。<sup>(3)</sup>プロローグはギリシア神話のナルキッソスの話の後日譚とも言うべき奇妙な話で、一体これがテキスト全体とどう関係するのか興味深いが、この小論のテーマとは直接関係がないのでここでは分析は行わない。

その後同じハーバーコリンズから新たに2002年版が出た。これにはコエー

リヨ自身による前書き，巻末にはインタビューと簡単な伝記，そのあとに「人生は旅である」という扉ページに続き，9ページにわたるコエーリヨの本の広告がついてる。ハーパーコリンズの熱の入れようが分かるというものである。ちなみに98年版にあった副題とプロローグはなくなっている。

『アルケミスト』は単純だが哲学的であり，リアリスティックな小説やドラマよりも，ファンタジー，昔話，お伽話に近い。つまり人間の魂のドラマを扱っていると言い換えられる。先ほども述べたようにそれは人間の成長のドラマ，少年から青年へのイニシエーションを真正面から取り上げている。舞台設定のエキゾチズムも魅力を添えている。色々な人や動物・物の助けを得て成長するサンチャゴ少年は知恵と勇気だけでなく，反省する力も備えている。彼は書物からだけでなく，自然や動物からも様々なことを学ぶのである。

扱われているテーマは夢の力，認識力，異化と自動化，勇気と知恵，旅と日常，人生とは，魂の秘密，更に謙虚さの重要性，また一見夢をなくしてしまったかに見える人々にも各々の事情がある，と知ることで生じる思いやり，思慮深さの大切さまで，多岐にわたる。

## (2) あらすじ

スペインのアンダルシアにサンチャゴという羊飼いの少年がいた。彼は同じ夢を二度見る。エジプトのピラミッドのところに行けば素晴らしい宝が見つかるという夢だ。彼はその夢を信じ，羊を売り払ってエジプトに渡る。サンチャゴは旅の途中でジプシーの女性，王と名乗る男，クリスタル商人など様々な人に出会うが，彼の探している宝が一体何なのか，サンチャゴが障害を乗り越えられるかどうかは誰一人知らない。幾多の試練の後彼は錬金術師に出会う。錬金術師はサンチャゴが自分の弟子になるにふさわしい人物であることを見抜いていた。宝物探しの旅は，心の中にある宝物を巡る瞑想へと変化していく。そして最後の命がけの試練を乗り越えた彼はついに宝物を手に入れる。しかし彼が手に入れたのは金貨などの物質的な宝物だけではなかった。物事の本質を理解する心と，愛する女性をもその途上で手に入れたのである。

### (3) 作品に即して

最初に、得てして見落とされがちで、大事な要素に触れよう。それはこのテキストの持つ、ユーモラスな感じである。『アルケミスト』は次のように始まる。「少年の名はサンチャゴといった。あたりが薄暗くなり始めた頃、少年は羊の群れを連れて教会の廃墟に着いた。教会の屋根は遙か昔に崩れ落ちて今はなく、かつて祭壇のあったところには巨大ないちじくの木が生えていた。」(3) このあとサンチャゴは羊の群れを門の中に入れ、読み終わったばかりの本を枕にして横になる。そして「この次はもっと厚い本を読もう。そうすればもっと長く楽しめるし、もっと気持ちのいい枕になるだろう」と独りごとを言うのである。『アルケミスト』はそのシリアスな面に注目されがちだが、このようにコミカルな感じが冒頭から存在する。シェイクスピアなどのコミック・リリーフと同じで読者をほっとさせると同時に小説世界に深い陰影を与えることになる。これもこの本の人気の秘密の一つと言える。このいちじくのある教会の廃墟にサンチャゴは最後に再び戻ってくる。そこは「スワハムの行商人」と基本的に同じである。

あらすじでも述べたようにこの小説は主人公の少年が自分の見た夢を信じ、宝物を手に入れようと旅に出る話である。当然のことながら「人生とは」、「夢とは」などといった言葉が沢山出てくる。中でも少しずつ形を変えながら何度も出てくるのは「おまえが何か望めば、宇宙のすべてが協力して、それが実現するように助けてくれる」(42)という言葉である。若者に限らず何かにチャレンジしようとしている人にとっては大いに励まされる言葉だが、これは次のように解釈することも可能だ。人が何かを本当にやり遂げようとするとき、普段自分の中に備わっているとは考えもしなかった力を発揮できるものである。そして真剣に力を傾ければ傾けるほど、当然のことながらそれはうまく行くことだろう。そのとき、その人はまるで「周りの人や世界が自分の夢の実現に協力してくれている」かのように感じるだろう。また、ユング心理学的な共時性ということもある。これは因果律とは全く異なる、ものごとの連関のあり方であり、それについての考え方である。簡単に言えば「時を得て複数の事柄が同時に整う」と言えばよいだろう。

また宝の発見に密接な関係のある事柄として自動化と異化について考えさせる箇所もいくつかある。例えば「同じ友人といつも一緒にいると、友人が自分の人生の一部となってしまう。すると、友人は彼を変えたいと思い始める。そして、彼が自分たちの望み通りの人間にならないと、怒りだすのだ。誰もみな、他人がどのような人生を送るべきか、明確な考えを持っているのに、自分の人生については、何も考えを持っていないようだった」(16)というところだ。この引用の前半では、それが人でも物でも、なじんだ存在は「当たり前」のものになり、それが本来持っている輝きが見えなくなってしまう、いわゆる自動化現象が友人同士の間でも起こることが語られている。後半は、自分のことは誰しも分からないものであることを読者に思い出させる。異化については「彼は新しいことをたくさん学んでいた。そのいくつかは既に体験していたことで、本当は新しいことでも何でもなかった。ただ、今まではそれに気がついていなかっただけだ。なぜ気づかなかったかというところ、それにあまりにもなれてしまっていたからだった」(46)という箇所もある。ある事柄を本当に知るにはそれを受け止める人の認識力や理解力が必要だということが、ここには易しい言葉で明確に書かれている。

作中には今を大切に生きることの重要性も何度か語られている。アフリカに渡ってすぐの頃、サンチャゴは市場で露天のキャンディ売りの少年が店を出すのを手伝ってやる。そして「このキャンディ売りは、将来旅に出たり、店の主人の娘と結婚するために、キャンディを作っているのではない。彼はそうしたいからやっているのだ」(45)と言う。

錬金術師については次のような説明の言葉が錬金術師と名乗る男自身の口から語られる。「[錬金術師とは]自然と世界を理解している男のことです。彼はその気になれば、風の力でこの野営地を破壊することもできます。」(147)

恋愛についての解説もある。

少年がその瞬間、感じたことは、自分が、一生のうちにただ一人だけ見つける女性の前にいるということだった。そして、一言も交わさなくて

も、彼女も同じことを認めたのだった。世界の何よりもそれは確かだった。・・・そして、そのような二人が互いに出逢い、目と目を合わせた時、過去も未来も、もはや重要ではなくなる。その瞬間しかないのだ。

(97 - 98)

一目見ることで直感的に、「この人こそ自分の生涯のパートナーだ」ということが分かる、サンチャゴの一目惚れを描いたシーンである。これは思春期の読者にとっては、大いに心を揺さぶられる一節であろう。

次に挙げるのはイギリス19世紀初期の詩人ウィリアム・ブレイクを思い出させる箇所である。「幸せは、錬金術師の言ったように、砂漠の一粒の砂の中に見つけられる・・・なぜならば、一粒の砂は創造の瞬間であり、しかも宇宙はそれを創造するために何億年もかけていた・・・。」(138) ブレイクの詩 'Auguries of Innocence' は 'To see a world in a grain of sand, /And a heaven in a wild flower.'<sup>(4)</sup>という書き出しである。コエーリヨは2002年ハーパーコリンズ版の前書きの中で、影響を受けた作家の一人としてブレイクの名前を挙げている。この部分を創作するとき、コエーリヨの念頭にこのブレイクの詩の一節があったことは間違いないだろう。しばしば幻想を見たと言われるブレイクのこのような宇宙的想像力は、コエーリヨのような作家にとっては極めてなじみのある、納得できるものに違いない。それはまた、現実の中に隠された一つの真実を言い当てている。私たち読者は、物理的に小さいものの中に宇宙の広さに匹敵する広がりを見いだせるのが想像力というものであることを、ブレイクを、またコエーリヨを読むことで改めて思い起こす。

上に引用した箇所に続く部分では、幸せと運命についてサンチャゴの心が彼に向かって語りかけている。「幸せな人は皆、自分の心に神を持っている」のであり「世界中の全ての人にはその人を待っている宝」がある。しかし「不幸なことに、ごくわずかの人が、彼らのために用意された道 彼らの運命と幸せへの道を進もうと」しないのであり、「ほとんどの人は、世界を恐ろしい場所だと思っています。そしてそう思うことによって、世界は



本当に恐ろしい場所になってしまうのです」(138)と心は告げる。人が夢を追いかけることの困難さ、そして認識のありようによって世界の相貌が変わってしまうこと、更に夢の実現を妨げるのは何よりもその人自身の心のありようであることが述べられている。

次は最後のクライマックスのエピソードである。錬金術師の助けを得て夢のお告げの宝物を見つけようと、ピラミッドを目指すサンチャゴは、内紛を続けるある部族の兵士に捕らえられ、窮地に立たされる。錬金術師はサンチャゴを錬金術師であり、「自然と世界を理解して」いる、だから彼は「自分を風に」変えることができる、と断言するのである。「恐怖に負けてはいけないよ」と錬金術師は言う。「でも、僕はどうやって自分を風に変えればいいのか、わからないのです」ととまどうサンチャゴに、錬金術師は更に次のように言う。「もし自分の運命を生きてさえいれば、人は知る必要のあることをすべて知っている。だが夢の実現を不可能にするものがひとつだけある。それは失敗するのではないかという恐れだ」(149)と。これはある意味ではごく当たり前のことである。人は自信を持って行えることには恐れを抱かない。従ってうまく行くことが多い。だが実力以上の何かに無理矢理挑戦したり、実力以上の力があるふりをしようとすると、自信を持たず、本来備えている力さえ十分に発揮できず、失敗することが多い。このように、経験のある大人、または若くても洞察力のある人間にとっては常識的な人生訓に満ちているのが『アルケミスト』の特徴の一つである。

このあとテキストは、極めてファンタジー的な色彩の濃いものとなる。そのことで読者にあまり違和感を抱かせないのはさすがである。ここに至る前に「こころ」がまるで独立した存在であるかのようにサンチャゴに語りかけ、この場面への心の準備を読者はすでにさせられているのと、プロット展開の必然性からこの変容がすんなり受け入れられるという二点はその理由として考えられる。

進退窮まったサンチャゴは砂漠、風、そして太陽と話をし、最後に太陽のアドバイスに従って「すべてを書いた手」の方に向き直り、祈り始めるのである。それは彼にとっていまだかつてない祈り、「言葉も願い事も」ない

祈りだった。そして少年は「大いなる魂に到達し、それが神の一部であること」を悟る。また無名の少年に過ぎないその彼自身が「奇蹟を起こすことが出来る」(160)と知ったのである。こうして悟りに達しつつある少年の周りでは風が吹き荒れ、そのお陰で少年は命拾いする。このあと彼は更に一つの試練に遭う。彼を死にそうになるほど痛めつけた男が、丁度「スワツハムの行商人」の話のように「自分はそんな馬鹿げた夢は信じないが」と前置きして、自分の見た夢をサンチャゴに教えてくれる。それはテキスト冒頭に出てきた教会の廃墟に宝物が埋まっているという夢なのであった。こうしてサンチャゴは見事、精神的な宝物と、財宝と、愛する女性を見いだしたのであった。

## 6. 結論

前にも述べたようにこれは若者の成長のドラマであり、勇気を持って夢を追いかけることの大切さや、開かれた感性を持つことの重要性を描いている。サンチャゴは自分の夢を追求していく中で周りの人々、動物や物に色々な形で助けられる。夢を追求出来ないまでも、私たちは日々生きていく中で私たちを取り囲むあらゆるものに助けられる。人間は勿論、動物や自然や街の風景に励まされることもあるだろうし、道ばたの小石にはっと何か感慨を抱くこともあるだろう。このようにして私たちはサンチャゴと共に謙虚さの重要性を自ずと体得するだろう。

また、サンチャゴの父も含めて彼の周りには若い頃の夢をとうの昔に捨ててしまった人々も沢山登場する。それら一見夢をなくしてしまったかに見える人々にもそれぞれやむを得ない事情がある。第一、サンチャゴの父が夢を諦めて日々の糧のために働いていなければ、サンチャゴは夢を追って旅立つことなどできなかったであろう。こうしてサンチャゴは思慮深さを身につけ、夢をなくしてしまった人、諦めざるを得なかった人への同情と共感も持てるようになる。

元になった「スワツハムの行商人」と『アルケミスト』を比べると見えてくるのはどういうことだろうか。そのことを考えるとき、私たちは What

(何を)だけでなく How (如何に語っているか)に注目することの重要性を改めて認識することになる。つまりある事柄を語るに際してどのような言葉をどのように使っているか。換言すれば表現の重要性ということである。

『アルケミスト』の場合、その語り方が現代の読者に合っていたのである。それがこの本を世界的ベストセラーに仕立てあげたことになる。

それではなぜこの本が世界的に大ヒットしたのか。三つの視点から考えていく。断っておくが筆者は決して『アルケミスト』や『ハリー・ポッター』が下らないと言っているわけではない。そうではなくて、所謂「爆発的」人氣がどこから生じるのかを知りたいと思うのである。

世界的ヒットの理由の第一に、現代の人々が一般にファンタジー的なものを欲しているということが上げられるだろう。もともと、世の中が殺伐としてくるとファンタジーが流行る傾向がある。ベトナム戦争当時は『指輪物語』(『ロード・オブ・ザ・リング』)がアメリカで大流行した。そこには現実逃避という側面と、現実の政治や、夢を持って生きられない社会への批判とが含まれていると言えよう。ちなみにこの時は「強大な力を秘めた、捨てられなければならない指輪」は核兵器にたとえられ、また「ガンダルフ(登場人物の一人で知恵者の魔法使い)を大統領に」と若者達は叫んだそうである。そして現代は「テロの時代」である。ベトナム戦争当時と同じように現実逃避への憧れと現実の政治や社会問題への批判的な考え方がファンタジーへの人々の憧れをかきたてていると言えよう。

二番目には、20世紀の終わり頃から主に子供達の心を捉えている TV ゲームの影響が挙げられる。『ハリー・ポッター』シリーズの作品もそうだが、『アルケミスト』にも TV ゲームに慣れ親しんだ子供たちが違和感なくとけ込める要素が数多くあると思われる。具体的には次のようなことだ。主人公が怪我をしても、その痛みがリアリティーを持って書き込まれていない。いいことも悪いことも、ネガティブなこともポジティブなことも、同様である。説得力を持ってリアルにありありと目に浮かぶように描かれているようで、どこかですっと現実から外れていく。しかも目の前で次々と話が展開していくので読者はそのことに気づかないし、気にもならない。こうして怪我

も痛みも、おいしいごちそうも嬉しい出来事も、すべて記号と化して次々とリアリティーを失っていく。読者に残るのは「ヒーローはこんなに大変な思いに耐えたんだ、偉い偉い。経験値100アップ！」或いは「ヒーローはこんなにサンデーが食べられたんだ。ラッキー！」といったような現実的な手触りを欠いたままの記憶、バーチャル・リアリティ体験をしたかのような表層的な思い出だけであろう。それらが、浅い午睡の心地よい夢のように、読者の意識の表面を擦過していく。

注目しなければならないのは上述のことが、決して最初に挙げた神話や伝説、お伽話などと同質ではないということだ。例を挙げよう。例えばシジフォスの神話を思い出すとき、私たちはシジフォスのどうにもやるせない辛さをどこかで追体験している。プロメテウスの肉体の痛さについてもしかりである。また例え助けられると分かっているにもかかわらず食われることにはその都度独特の痛ましさが伴う。その切実さがどこか稀薄なのが『ハリー・ポッター』であり『アルケミスト』であると思われる。(あるいはこれは筆者の年齢による個人的な、或いは一定年齢以上の人々とは共有可能な、年代によることなのかもしれないが、そうではないと仮定して議論を進める。)

『ハリー』と『アルケミスト』に共通なのは話の展開のテンポの速さであろう。『ハリー』は決して短くはないが、様々な筋が錯綜し、次々に仕掛けられる謎が謎を呼び、読者は手に汗握りつつ本を手放せないこととなる。

『アルケミスト』はそれほど複雑な筋ではないが、その代わり一頁に幾つもの警句めいた言葉が並んでいて読者は思わずそれに気を取られ、結果として話の運びに多少無理があったとしてもあまり気にすることなく読み進むこととなる。『アルケミスト』では「何もかもがひとつである」というニュー・エイジ的な言葉が頻出するのも少々気がかりな要素である。

また、主人公が怪我をしたとしても、先に述べたようなテレビゲーム感覚で捉えらるゝとするなら、怪我という事実リアリティーを持たせる努力を少なくとも読者は納得してくれることとなり、『ハリー・ポッター』第3巻のロンの場合のように、骨折した人物がうめき声もたてずに果敢に痛みを耐え、延々と展開するドラマに立ち会っていたとしても、読者は何ら不自然さも覚

えず疑問も抱かないこととなる。そこから、「人を殺してみたい」と考える若者、そして現実にそれを実行してしまう若者の出現する地点までの距離は果たしてどれ位あるのだろうか。

三番目は IT 社会の影の部分である情報の一様化の危険ということである。池内了によれば一様化した情報はアナウンス効果を生むという。情報が人々を感覚的に反応させ、安易に同調したり、反撥したりしてしまうのである。情報が増えることによって多様化が進むのではなく、かえって一様化してしまう。例えば『ハリリー・ポッター』への大人の反応は大きく二つに分かれる。一方は多くの子供たちに負けず劣らず熱狂的なファンになる人々である。そしてもう一方はこれも極めて熱狂的に『ハリリー・ポッター』を批判・攻撃し、「非教育的だ」と発禁措置を求めたり、焚書しかねなかったりする大人達である。その特徴はいずれにしても大変感情的で極端な反応をすることである。あふれかえる膨大な量の情報の収集に追われ、自分で物を見て判断することも、意見形成して発信することもしなくなれば、なおのこと人は受け身的にならざるをえない。かくして例えば『ハリポタ』人気に火がつけば、我も我もと同じ小説に殺到する現象がこれまで以上に起こりやすくなっていると言えよう。こうして熱狂的なファンの一人となるか、あるいは反対にきわめて感情的に排斥するか。いずれにしてもそのような読者の動きはテキスト自体の価値とは関係のないところで展開される。そのことは、当のテキストにとっても、じっくり本と向き合おうとする読者にとっても、決して幸福な状況とは言えないのではないだろうか。

またこのような IT 化のネガティブな影響はコマーシャルイズム、出版社を始めとするマスコミ、関連商品売る様々な世界中の企業とそれに踊らされる消費者という形で現れるにとどまらない。最近では作家自身によるテキストの私物化とでも言うしかない状況が出来して、それに拍車をかけているように思われる。小説は書き上げられ、一旦作家の手を離れて出版されれば、すでにいわば公共の財産（版權という意味ではない）である。作家といえども、言葉の間違いや誤植の訂正、また改版の際の書き直しなど一定の限界を越えて、一旦出版した作品及びその関連領域に手を出すことは許されないは

ずである。

ところがコエーリヨは98年版で一度つけた「プロローグ」を取り去り、02年版では新たに自身による前書きをつけている。前の「プロローグ」はテキストにしっかりとなじまない感じであったが、02年版の前書きもかえってない方がよいように思われる。創作が無意識に深く関わることである以上、テキストの解釈は作家その人ですら正確でない場合がありうるのは、文学に携わる人間にとっては常識である。批判的に読む力のない若い読者にとって、この02年版の前書きは、かえってテキストの価値をおとしめることになると感じられる。『ハリー・ポッター』のローリングについても色々ときな臭い話があるようである。それらは不幸にも作家が消費主義或いは企業に踊らされて作家の何たるかを少々誤解した結果の例ということになるのだろう。それらが巡り巡って読者の目にテキストの価値を落とす結果になるとすれば、全くもって不幸なことであり、視覚優位の文化やIT化はこんな形でも我々の上に暗い影を落としているということになる。

読者がじっくりテキストと向き合うこと、アナウンス効果や資本主義的グローバルイズムに踊らされず、自分の目で冷静にテキストの価値を見極め、読書を楽しむこと　それが出来ないとしたら、IT化は百害あって一利なしということになってしまうだろう。それを防ぐ手だては、今のところ個々の読者の努力と企業の良心的姿勢への希望（殆ど期待できないが）くらいしか筆者には思いつかないのが現状なのである。

\*テキストは Paulo Coelho, *The Alchemist* (London: HarperCollins Publishers, 2002) tr. By Alan R. Clarke を使用し、引用頁は( )内に数字で示した。また訳は角川版(山川紘矢, 山川亜希子)を参照した。

注

(1) この小論は恵泉女学園大学宗教部主催の2006年サマー・キャンプでの発表原稿に加筆したものである。発表の機会を与えてくれ、耳を傾けて適切な質問やコメントをくれた教職員、学生の皆さんに心から感謝

いたします。

( 2 ) 実には世界中には女性が主人公のおとぎ話も沢山存在する。それがこれまであまり人の目に触れてこなかったのは、お伽話の編纂者が男性であるか、または性差別的な考え方の人であったためである。参考 *Virago Book of Fairy Tales*, ed. By Angela Carter

( 3 ) アルケミストはキャラバンの誰かが持ってきた本を拾い上げた。パラパラと見てみると、そこにはナルキッソスの話が載っていた。この話の終わりはアルケミストの知っている例の有名は話とは少し違っていた。ナルキッソスが自分の美しさに見ほれて湖に落ちて死に、後に咲いた花はナルキッソスと名付けられる。そのあと、哀しみの涙で塩水になってしまった湖に、森の女神達が「なぜそんなに嘆き悲しむのか」と尋ねる。すると、「私はナルキッソスのために涙を流しているのです」と湖は答える。「無理もない。あなただけが彼の美しさを間近に見ていたのだから」と女神が答えると、湖は当惑する。「彼が美しいとは気づきませんでした。私は彼のために泣いていますが、それは彼が私の岸边で跪くたびに彼の瞳の奥に映る私自身の美しい姿が見えた、それが見られなくなったからなのです。」これを読んでアルケミストはなんていい話だろうと思うのだった。

( 4 ) To see a world in a grain of sand,  
And a heaven in a wild flower.  
To hold eternity in an hour,  
And infinity in your palm....

---From 'Auguries of Innocence' by William Blake

引証資料

Coelho, Paulo. *The Alchemist*. London: HerperCollins Publishers, tr. By Alan C. Clarke, 1998.